

私は、国連アジア極東犯罪防止研修所（UNAFEI）で開催された「第15回汚職防止刑事司法支援研修」に参加しました。

本研修のテーマは、「汚職防止のための効果的な刑事司法の運営の在り方」であり、本研修には、日本を含む21か国の刑事司法関係機関から、合計32名の研修員が参加しました。

本研修では、UNAFEIの所長、各教官の講義、国内の刑事実務家の講義によって日本の汚職防止に関する刑事司法制度やその実情について、また、海外から招へいされた客員専門家の講義によって、国際的な汚職対策の動向や実践例等について学んだほか、各国参加者による発表によって、各国の汚職対策の現状について紹介を受けました。

その後、3つのグループに分かれてのグループワークショップ等を通じて、研修参加者同士でテーマに沿った議論を行いました。

今回、感想を述べる機会をいただくに当たり、私は、改めて本研修で過ごした日々を振り返ってみました。

感想を一言で言えば、「得難い経験をたくさんできた本当に有意義な研修だった。」というのですが、3つのことについてお話ししたいと思います。

一つは、各国の制度や実情を知った上で、日本の制度や実情について考える機会をいただいたこと、もう一つは、現在、あるいは近い将来各国の汚職防止の中核となる人々と、お互いの肩書きを抜きにした率直かつ積極的な意見交換ができたこと、そして、最後の一つが、そういった人々と一つ屋根の下、35日間にわたって生活できたことです。

一つ目に関してお話しすると、私は、本研修に参加するまで、海外の汚職対策の現状についてはもちろん、汚職防止のためにUNCAC（国連腐敗防止条約）という条約が存在している、というような基本的な知識すら持ち合わせていませんでした。

そして、日本では、確かに汚職は大きな問題の一つではあるものの、少なくとも裁判官や検察官といった司法の中核における汚職は考えられないと言ってよく、国家機能の根幹を揺るがすような深刻な問題ではないし、今後もなりえないだろうと思っていました。

それが、各研修参加者の発表を聞いてみると、その多くでは、例えば対象者に対する秘密録音や監視カメラの設置が比較的容易にできるなど、日本よりも捜査機関に有用な制度が充実しているにもかかわらず、政府機関に汚職が蔓延し、国家の機能不全を来たすまでに至っている例が少なくないこと、裁判官を含む司法関係者の汚職も深刻な問題になっていること等を知りました。

そして、各教官や客員専門家の講義を受けて国際的な動向等に関する理解が

進んでいく中で、汚職防止には、汚職しにくい環境作りという「予防」、適切な法の「執行」、そして汚職を汚職として認識、対処するための「教育」という各側面で、いずれも高い水準を満たすことが必要不可欠なのだということを実感しました。

さらに、その後のグループワークショップでの議論の中で、なぜ日本では、そこまで汚職が蔓延していないのかという点について考えさせられたのですが、私なりに、日本は、汚職防止という観点からの施策は乏しいものの、本来汚職防止を意識して作られていない制度が、他の多様な制度との相互作用によって、実質的に「予防」を担保しており、特に司法関係機関に対する「予防」制度の充実が、他機関に対する「執行」の裏付けとなり、そういった「予防」「執行」の確保や、マスメディアの報道等によって、「教育」も高い水準で提供できているのではないかと思うようになりました。

逆に言えば、「予防」策に関して、汚職防止への効果という観点からの整理が十分でないために、常に汚職防止という観点を意識するようにはしていないと、そういった効果を考えない改変がなされて汚職対策に欠陥が生じる可能性がある、すなわち、日本にとっても、国家機能に支障を来すほどに汚職が蔓延する事態は起こりうると感じるようになり、汚職防止という観点を意識することの重要性を認識することができました。

次に、二つ目に関してお話しすると、我々は、今回、お互いの肩書き等にとられることなく、率直かつ積極的な議論ができました。それは、そもそも、事前にお互いの国の制度について学ぶ機会があったわけではないので、相手の肩書きを聞いてもピンとこないということもあったかもしれませんが、何より、我々は、汚職という、大きく、深刻で切実な課題に取り組む同志であり、少しでも良い対策を見出すには、肩書きなど構ってられないという意識が強く働いていたからだと思います。

言語も文化も所属組織も異なる参加者が、お互いに率直かつ積極的に発言し、議論することで、より広い視野から問題を検討することができたように感じています。

そして、三つ目です。日本にいながらにして、20か国からやってきた人々と、一か月間以上も寝食を共にして、「異文化コミュニケーションは視野を広げる。」、この言葉の意味を文字通り体感した35日間でした。

当初は、語学力のなさから意思疎通がうまく取れなかったり、海外参加者の言動に戸惑ったりしたこともありました。

しかし、一週間も経つと、語学力のなさを身振り手振りなどで補うことを覚え、また、参加者はみんな個性的であるとともに、とても親切で気持ちの良い性格だということが分かってきました。その後は、どんどん親しくなって、夜

には一緒に買い物や食事に行ったり、ビリヤードなどで遊んだりし、週末には観光地に行ったりして楽しく生活することができました。

浅草・秋葉原観光に始まり、たこ焼きパーティー、高尾山登山、ビール工場見学、カラオケ&ダンスパーティー、ブラジルからの研修参加者の発案によるシュラスコバーベキューパーティーなどなど、一つ一つがいい思い出になりました。

研修も終盤に差し掛かってくると、海外研修参加者からは、ロ々に「UNAFEIはもうひとつの家であり、スタッフや参加者はもうひとつの家族だ。」という声が聞かれるようになりましたが、私や他の日本人研修参加者も全く同感でした。

昼間は、肩書きにとらわれず率直かつ積極的に意見交換をし、夜間や休日は、一緒に余暇を楽しむ。まさに家族のような濃密な時間を過ごした35日間だったと思います。

退寮の日、いつも陽気な海外参加者が涙を流して別れを惜しんでいたこと、お互いに今後も連絡を取り合おうと固い約束を交わしたことは、忘れられません。

最後になりますが、我々研修参加者は、言語も文化も異なる多様な国から合計32名も集まったのですが、深刻なトラブルを起こしたことなど一度もありませんでした。

それどころか、我々は、UNAFEIやお互いのことをもうひとつの家庭・家族であると感じ、夢のようなあたたかい生活を送ることができ、そして、お互いに深い絆で結ばれ、今後も永く続く友情と協力関係を築くことができました。

それは、研修当初から、時には率先して先頭に立ち、時には我々日本人研修参加者をサポートして研修参加者相互の交流を促進するなど、陰に日向にきめ細やかにお心遣いをくださったUNAFEIの教官の皆様や、まさに縁の下の力持ちとしてサポートしてくださった事務室、食事、掃除等全てのスタッフの皆様のおかげにほかなりません。

UNAFEIの全ての皆様に、最大限の敬意と感謝を申し上げますとともに、今後のますますのご発展を祈念しております。

本当に、お世話になりました。ありがとうございました。